

「奉和春閨怨」詩と駱賓王「艷情、代郭氏贈盧照鄰」詩

——初唐歌行體作品における同質性と差異性、あるいは嵯峨朝「奉和春閨怨」詩の獨自性——

半 谷 芳 文

前言

駱賓王「艷情、代郭氏贈盧照鄰」詩は、題中の「艷情」の語が「奉和春閨怨」詩三篇を始めとして他八篇を収める『文華秀麗集』の部類に、類題名として使用されている。當時、艷詩を収める部類の類題名としては、一般的な「閨怨」を始め、「情」(『文選』)あるいは「閨情」(『藝文類聚』)など、典據のある採用すべき他の呼稱を、編撰者は當然、理解していたはずである。しかし、當該駱詩の題以外におそらく使用例を検索しえない「艷情」が選擇されたことは、三漢詩集期における中國の先行作品に對する著しい規範意識を想起するとき、きわめて特異である。むしろそれは當該駱詩の影響の著しさを充分に豫想させるものである。しかし、その部類「艷情」の冒頭に收載された

「奉和春閨怨」詩三篇と駱詩との間には、後述するように強い緊密性とともに深い斷絶も認められる。そこで本稿では、駱詩の修辭・詩體と抒情的特質を明らかにしたうえで、「春閨怨」詩との同質性と差異性を述べ、改めて「奉和春閨怨」詩三篇の作品としての特質に迫りたい。

(一)

始めに、駱賓王「艷情、代郭氏贈盧照鄰」の句法・押韻・修辭、詩體と詠作内容について検討してゆこう。まず本文と訓讀文を記す。¹⁾

艷情 代郭氏贈盧照鄰

艷情、郭氏に代りて盧照鄰に贈る。

中國詩文論叢 第三十七集

迢迢芋路望芝田、眇眇函關限蜀川。歸雲已落涪江外、還雁應過洛水塵。
(仙韻、田は先韻)

迢々たる芋路 芝田を望むも、眇眇たる函關 蜀川を限る。歸雲已に落つ 涪江の外、還雁應に過るべし

洛水の塵。

洛水傍連帝城側、帝宅層甍垂鳳翼。銅駝路上柳千條、金谷園中花幾色。
(職韻)

洛水傍ひ連なる 帝城の側、帝宅の層甍 鳳翼を垂す。銅駝の路上 柳千條、金谷園中 花幾色ぞ。

柳葉園花處處新、洛陽桃李應芳春。妾向雙流窺石鏡、君住三川守玉人。
(眞韻、ただし春は諄韻)

柳葉 園花 處々に新たなり、洛陽の桃李 芳春に應ず。妾は雙流に向りて 石鏡を窺ひ、君は三川に住みて 玉人を守る。

此時離別那堪道、此日空牀對芳沼。芳沼徒游比目魚、幽徑還生拔心草。
(皓韻、ただし沼は小韻)

此時 離別 那ぞ道ふに堪へん、此の日 空牀 芳沼に對ふ。芳沼には徒らに遊ぶ 比目の魚、幽徑には還つて生ず 拔心の草。

流風廻雪儻使娟、驥子魚文實可憐。擲果河陽君有分、貫酒成都妾亦然。
(仙韻、ただし憐は先韻)

流風の廻雪 儻いは使娟たり、驥子の魚文 實に憐づべ

成都妾亦然。

し。果を擲たれし河陽 君分有り、酒を貫りし成都 妾も亦た然り。

莫言貧賤無人重、莫言富貴應須種。綠珠猶得石崇憐、飛燕曾經漢皇寵。
(腫韻、ただし重は用韻)

言ふ莫かれ 貧賤 人の重んずる無しと、言ふ莫かれ 富貴 應に種を須むべしと。綠珠は猶ほ得たり 石崇の憐み、飛燕は曾て經たり 漢皇の寵。

良人何れ處醉縱橫、直如循默守空名。倒提新練成慊慊、翻將故劍作平平。離前吉夢成蘭兆、別後啼痕上竹生。
(庚韻、名は清韻)

良人何れの處にか 酔ひて縱横たる、直た循默のごとく 空名を守る。倒つて新練を提げて 慊慊と成し、翻つて故劍を將つて 平平と作す。離前の吉夢 蘭兆を成し、別後の啼痕 竹性に上る。

別日分明相約束、已取宜家成誠勸。當時擬弄掌中珠、豈謂先摧庭際玉。悲鳴五里無人問、腸斷三聲誰爲續。思君欲上望夫臺、端居懶聽將難曲。
(獨韻)

別日分明に相約束し、已に家に宜しきを取りて 誠勸を成せり。

當時掌中の珠を弄しまんと擬するに、豈に謂はんや 先づ庭際の玉を摧かんとは。悲鳴すること五里 人の問ふ無く、腸斷ゆること三聲 誰か續ぐを爲さん。君を思ひ

當時掌中の珠を弄しまんと擬するに、豈に謂はんや 先づ庭際の玉を摧かんとは。悲鳴すること五里 人の問ふ無く、腸斷ゆること三聲 誰か續ぐを爲さん。君を思ひ

て上らんと欲す 望夫臺、端居して聽くに懶し 將雛曲。

沈沈落日向山低、簷前歸燕竝頭棲。抱膝當牕瞻夕兔、側耳空房聽曉鷄。舞蝶臨階祇自舞、啼鳥逢人亦助啼。(齊韻)

沈沈たる落日 山に向ひて低れ、簷前の歸燕、頭を竝べて棲む。膝を抱へ牕に當ひて 夕兔を瞻み、耳を側て空房に 曉鷄を聽く。舞蝶 階に臨んで 祇自だ舞ひ、啼鳥 人に逢ひて 亦た啼くを助く。

獨坐傷孤枕、春來悲更甚。峨眉山上月如眉、濯錦江中霞似錦。(寢韻)

獨り坐して 孤枕を傷しみ、春來りて悲しみ更に甚だし。峨眉山上 月は眉のごとく、濯錦江中 霞は錦に似たり。錦字廻文欲贈君、劍壁層峯自糾紛。平江森森分青浦、長路悠悠閉白雲。(文韻)

錦字の廻文 君に贈らんと欲するも、劍壁の層峯 自ら糾紛たり。平江森森として 青浦を分かち、長路悠悠として 白雲に閉てらる。

也知京洛多佳麗、也知山岫遙虧蔽。無那短封即疏索、不在長情守期契。(霽韻、ただし蔽は祭韻)

也た知る 京洛 佳麗多しと、也た知る 山岫 遙かに虧蔽すと。那んともする無し 短封即ち疏索なるを、長情に在ひて 期契を守らん。

「奉和春閨怨」詩と駱賓王「艷情、代郭氏贈盧照鄰」詩(半合)

傳聞織女對牽牛、相對銀河隔淺流。誰分迢迢經兩歲、誰能脈脈待三秋。情知唾井終無理、情知覆水也難收。不復下山能借問、更向盧家字莫愁。(尤韻)

傳え聞く 織女 牽牛に對ひ、銀河に相對して淺流に隔てらると。誰か分らん 迢迢として兩歲を經るを、誰か能く脈脈として 三秋を待たんや。情に知る 井に唾するは 終に理無しと、情に知る 覆水は也た收め難しと。復た山を下りて 能く借問せず、更に盧家に字ぎし莫愁を向はんや。

はじめに句法・押韻・修辭、詩體を確認していこう。これらはすでに鈴木修次氏によって一部指摘されているが、行論上、改めて述べておきたい。

この篇は七言句が六十二句、五言句が二句から成る全六十四句の作品である。押韻は換韻格、同韻を一段とすれば、初句と偶數句末に韻を踏む。修辭からみると、同字の反復的使用——「莫言貧賤無人重、莫言富貴應須種。」など——、蟬聯體——「此日空牀對芳沼、芳沼徒游比目魚、」など——、雙擬對——「峨眉山上月如眉、濯錦江中霞似錦、」など——が用いられている。

これらの特徴から判斷すれば、この作品は前稿に考察した劉希夷「代白頭吟」・駱賓王「帝京篇」・盧照鄰「長安古意」と同

じく七言（雜言）古體詩、いわゆる初唐の歌行體に屬する作品である。

表現手法を見ると、作中に一人稱としての人物「妾」（郭氏）を設定し、「妾」のモノローグによって展開する。さらにそこにはストーリーがあることがわかる。⁽⁴⁾これらの特徴から判断すれば、前稿に述べた古樂府の表現手法を取り入れていることが了解できよう。

次に詠作内容の検討に移ろう。まずストーリーを記す。

郭氏は蜀で盧（照鄰）氏の愛人として睦まじく暮していた。ところが盧氏は洛陽に歸ることになる。その時、郭氏はすでに身籠っていた。蜀を去るに當たり盧氏は郭氏に、ほどなく戻り結婚すると約束する。しかし二年過ぎてても戻らぬばかりか、盧氏は洛陽で新たな愛人と暮し始めていた。郭氏は生み育んでいた最愛の子にも死なれるが、盧氏からは手紙さえも稀にしか届かない。この絶望的な境遇にあっても盧氏への變わらぬ戀情に苦しむ。しかし最後は盧氏との復縁はもはやないと自分に言い聞かせる。

このストーリーは盧氏と郭氏の間起こった實際の出來事に基づいており、この郭氏の悲戀に深い同情を寄せた駱賓王が、彼女に代わってその心情を綿々と綴った作品、と言われている。つまりストーリーは實録、實録風の内容であり、したがって、さきほどこの作品は古樂府の表現手法に倣ったと述べたが、後

述するように「虚構」という古樂府の本質的な要素は受け入れていない。

この作品には、郭氏の棄てられた痛苦、愛兒を失った悲哀、盧氏への斷ち切れぬ戀慕、つまり棄婦（郭氏）のさまざまな眞情が、心變わりした良人（盧氏）の様子と對比させながら、切々と詠じられている。それが作中の一人稱的人物「妾」（郭氏）の獨白という表現手法を用いたがゆえに、あたかも息づく「女」がいま語っているような迫眞性に溢れる抒情が、讀者（聞き手）に迫ってくるのである。

では、右に見てきた特徴を持つ駱詩は、初唐歌行體の諸篇のなかでどのように位置付けられるのであろうか。

(二)

駱賓王のこの作品も、また先に考察した劉希夷「代白頭吟」・駱賓王「帝京篇」・盧照鄰「長安古意」も、同じく初唐の七言（雜言）古詩であり、歌行體と言われるジャンルの作品であった。鈴木修次氏はこれらの作品も含め初唐の歌行體作品全般を論じて、「ダイナミックで、人間感情の叫びを、自由にうたおうとするもの」と述べ、初唐における今體律詩の成立とは別の「唐詩の新しい胎動」の一つ、と唐詩史に位置付けている。⁽⁵⁾ここで注目したいのは、初期歌行體の諸作品の文藝的な特質を述べた次の見解である。

「一種のバターンともみらるべき類型的な感情が流れる。それはいうなれば、ものあわれに似た感情である」、あるいは、

「語られる情緒は、華麗なもののかげに宿る哀愁、人生の無常の悲しみが、もっぱらくかえされる」。

ここに言う「ものあわれに似た感情」・「華麗なもののかげに宿る哀愁、人生の無常の悲しみ」が、前稿に指摘した虚無感・憤懣・不偶感、悠久の自然と有限な人事の自覚からくる哀しみ等々にほぼ相當するとすれば、その趣旨にほとんど異論がない。しかしながら、少なくとも次に示す「艶情、代郭氏贈盧照鄰」に對する見解、それについてはどうであろうか。

「悲戀の感傷に託しつつ人生無常の感慨を、ことばと情緒とを樂しみながら、語り續けている。」

まず「ことばと情緒とを樂しみながら、」とは、おそらくこの作品に同字の反復的使用・蟬聯對・雙擬對、そして當時の俗語の多用な使用が見られるからいのであろう。ここで問題にしたいのは、當該駱詩の文藝的特質を初唐の歌行體作品全般と同じ傾向のなかに捉えている點である。

「艶情、代郭氏贈盧照鄰」は「人生無常の感慨」が、初唐の他の歌行體作品と同様に歌われているのであろうか。確かにこの作品も内容を突き詰めてゆけば、それを全く否定することはできない。しかし、そもそも郭氏の運命に強い同情を寄せて制

「奉和春閨怨」詩と駱賓王「艶情、代郭氏贈盧照鄰」詩（半合）

作されたというのであれば、郭氏の痛切な心情を詠めることをまず求めるであろう。その際、「人生無常」というテーマを、他の初唐の歌行詩篇と同じように詠じようとするのであろうか。

ここに聽かれるのは、孤閨に憂悶するばかりか嬰兒までも失った悲哀の底にもがきながら、懸命に生きようとする「女」の心の叫びである。一方、「人生無常の感慨」は、歡愛から苦悶と絶望に至る郭氏の命運を距離を置いて冷靜に見つめることから、はじめて思い至るものであろう。それとこの作品との間にはやはり本質的な隔たりがあり、決してアンビヴァレンスな抒情構造を持った作品とは理解しがたいのである。従來の閨怨詩が、たとえどれほど見事に棄婦・孤閨の心姿を詠じていても、結局、それらを玩弄する域を脱しえなかった。しかし「艶情、代郭氏贈盧照鄰」は、その枠を突き抜けた作品であったのである。⁽¹⁾

(三)

「艶情、代郭氏贈盧照鄰」詩から「奉和春閨怨」三篇が大きな影響を受けたことは、「艶情」という詩題中の語を類題名に採用していることから、充分に想定しうる。ではそこで何が保持・吸收され、何が排除されたのであろうか。

まず兩者の詩體から比較していこう。「奉和春閨怨」三篇は四十句前後の七言(雜言)古體詩であったが、七言句以外の句——三篇ともに三言句が四句、他は七言句——は極めて少なかっ

た。この句法の傾向を前稿に挙げた他の歌行體作品も合わせて比較すると、三篇はこの盧詩の句法に最も近い。押韻法も換韻格を探り、同韻の段を一段と見るとき一句目末にも韻を踏み、両者は同じである。

修辭に關しては、兩篇ともに同字の反復的使用・蟬聯對・雙擬對の使用が見られる。ただし、篇中の使用傾向から見れば、盧詩に對し「奉和春閨怨」三篇は明らかに使用頻度が低い。

措辭を見ると、例えば「女」の心姿を描寫する際に用いられた表現や典故では、以下のように共通する内容を擧げることができる。

- ◎芳沼徒游比目魚 池前悵看鸞比翼(鹿取) ◎簷前歸燕竝頭棲 梁上暫對燕雙栖(鹿取)・杏梁來燕比翼栖(識人) ◎啼鳥逢人亦助啼 窓外鶯啼妾復啼(識人) ◎錦字廻文欲贈君 機中織錦詎能嘉(清公)・晚來嬾織機中錦(識人) ◎無那短封即疏索 一別十年音信賒(清公)・閨閣連年音信稀(識人)

前稿に検討した古樂府及び初唐の歌行體作品の場合と比較すれば、この略詩のほうに共通・類似する内容や措辭がより多いことがわかる。

表現手法は前述したように、虚・實の差異はあるがともに「物語」があり、作中に一人稱的人物「女」を設定して、彼女が獨白してゆく手法は共通する。

兩篇に展開されるストーリーの筋立てを見れば、睦ましい夫婦の生活があつて別離が訪れ、獨り残された「女」のもとには手紙さえも稀で、「女」は孤閨に苦悶する、という内容である。それらはほぼ共通しているといえよう。

右のように比較してみると略詩と「春閨怨」詩は、修辭・措辭・詩體、表現手法、ストーリー内容、そして迫眞性ある抒情に至るまで同様、あるいははなはだ類似していることがわかる。これは「奉和春閨怨」詩三篇が、駱賓王「艶情、代郭氏贈盧照鄰」からいかに深い影響を受けていたのかを示すものであろう。では、「奉和春閨怨」詩三篇は、修辭から抒情的特質に至るまで「艶情、代郭氏贈盧照鄰」をほとんど景仰・倣擬した作品と理解してよいのであろうか。

(四)

「奉和春閨怨」詩と略詩の間には、決定的な相違があつた。兩者はともに古樂府の表現手法を探り「女」を詠作對象として、精彩溢れ迫眞性に富む抒情的特質を持つまではほぼ同じであつた。だが、略詩は「女」の苦惱を、「奉和春閨怨」詩は「女」の艶美を描いて對極的であつた。略詩は實録、あるいは實録風の「物語」によって現實に生きる棄婦の憂悶を訴え、「奉和春閨怨」詩は虚構の「物語」によって平安詩人の憧れる艶婦の心姿の美しさを描いて、まったく對照的であつたのである。

こうした両者の相違をそれぞれの篇末四句を例に挙げて、改めて作品に確認していこう。

「艶情、代郭氏贈盧照鄰」から見てゆこう。

情知唾井終無理、情知覆水也難收。不復下山能借問、更向

盧家字莫愁。

情に知る 井に唾するは 終に理無しと、情に知る 覆

水は也た收め難しと。復た山を下りて 能く借問せず、

更に盧家に字ぎし莫愁を向はんや。

試譯Ⅱ「遠く旅立つものでも井戸は汚さぬ」というように、

これまでのどを潤してくれた井戸を汚すのには道理がありません。(それと同じように盧(照鄰)さまが新しい愛人を持ちたからといって、彼を恨み憎んではいけないとわかりました。)盆からこぼれた水は一度と二元には戻りません。

(それと同じように盧(照鄰)さまとの復縁は叶わないと悟りました。)
「前婦が元の夫に出會い、新妻と自分とはどちらが良いかと尋ねると、元の夫は新妻は舊妻にかなわないと答えた」という話が詩にあります。その詩の話のようにはやんわりと復縁を望む気持ちはずであります。ですからどうしてあの「盧家に嫁いだ洛陽の莫愁」など、もはや慕い羨みまじょうか。

ここに語られているのは、盧氏への戀情や復縁の望みを断ち切り、獨り生きていこうとする郭氏の懊惱である。つまり、實

「奉和春閨怨」詩と駱賓王「艶情、代郭氏贈盧照鄰」詩(半合)

在する、あるいは現實に起こりうる棄婦の喘ぎや孤閨の苦しみに根ざした「女」のリアルな「生」の心情である。

一方、「奉和春閨怨」詩からは、典型的な例として朝野鹿取の篇末四句を挙げよう。

丈夫何時凱歌歸、不堪獨見落花飛。落花飛盡顏欲老、早返

應見片時好。

丈夫何れの時にか凱歌して歸る、獨り落花の飛ぶを見るに堪えず。落花飛び盡くして顔老いんと欲す、早く返りに應に見るべし片時の好(みめうるは)しきを。

試譯Ⅱ立派な我が夫は何時になれば征戎から勝利の歌とともに歸ってくるのでしょうか。私一人で散り舞う桃や李の花々を見るのには耐えられません。花々が散り落ちてしまう頃には私の容色も衰えましょう。どうか一日も早くお戻りになってほんの一時しかない(桃李の花のように輝く)今の私の艶やかさをご覽くださるのがよい。

ここではいつか訪れる容姿の衰えに慄く翳りさえも、桃李の花々に喩えられた今の艶やかな美しさを引き立てている。最終句に自ら語る「片時の好(みめうるは)しき(姿)」とは、今を過ぎれば失われてしまう、それゆえにいっそう可憐で艶やかな女性的美しさであり、それこそが「奉和春閨怨」詩の詠作しようとした対象そのものであろう。

駱詩は現實の「女」の苦惱を、「春閨怨」詩は虚構によって

「女」の艶冶な美しさを描いており、ともに精彩に富み迫眞性に溢れる作品ではあっても、全く對照的なのである。

(五)

「春閨怨」詩が示した略詩との對照性——「現實」と「虚構」、
「女」の懊惱」と「女」の艶やかな美しさ——とは、いったい何を明らかにするのか。これらはさまざまの意味を持つであろうが、ここでは、詩制作における制作基盤や志向性を、最後には日本平安詩人の独自の文藝的感性の發現を示すものとして捉えたい。

平安・嵯峨朝の官人詩人たちは、古樂府の表現手法によるこれまでにはほば未経験の抒情を持つ「艶情、代郭氏贈盧照鄰」詩に驚き魅せられながらも、現實世界に根差す暗然たる内容は詠作對象から排除していた、といえよう。その理由は再三述べたが、ここでも官人詩人によって宮廷という「集團の場」で制作された「奉和・應制」詩であったことにある。そこでの詩の機能から考えれば、それは當然の排除であろう。ちなみに詩の評価に際し、「個の場」で制作された個別的表現が普遍性に至っている作品をより尊ぶ立場から三漢詩集を評價しても、一面的なものでしかない。むしろここで注目すべきは、詠作對象に「女性の美しさ」を選択している点である。

律令政治を實踐する官人詩人が編撰した總集に唱えられた

「文章經國」的文藝觀を、もっともよく體現する「奉和・應制詩」という表現様式を探りながら、その文藝觀からもっとも遠い詠作對象「艶冶な女性の美しさ」を詠じている点である。確かにこれは理念と實態の扞格ともいえよう。しかしこれこそ「文章經國」的文藝觀からの桎梏から自立し、「四季と戀を愛惜する」本朝人の詩的感性を具現化した顯著な文藝的な營爲、と理解すべきではなからうか。同時に「奉和春閨怨」詩三篇が『文華秀麗集』の「唯美性」という文藝的な性格を、最も顕在化している作品でもあることも示している。

略詩の強い影響を受けながら「實錄」を「虚構」に變え、古樂府の「虚構性」を吸収・保持して女性美を詠じた「奉和春閨怨」詩三篇は、従來には稀な抒情的特質を放つ佳篇であった。それゆえに、部類「艶情」冒頭に配列され、今日的な鑑賞からも評價されたのであろう。⁽⁸⁾確かにこれらに續く作品は、『經國集』の亡佚した卷々に収載されていた可能性もあろうが、現段階では見いだせない。⁽¹⁰⁾だが、臆測すれば、實錄性を排した理由は、單に宮廷詩の性格・機能のみにあるばかりではないだろう。三篇の「女」の心姿に「待ちわびる女」という既視感を覺えるとき、「虚構」(物語)、および「虚構性」による長篇・佳作を詠作しえたのは、物語文學の興隆をもたらす文藝的な資質と同質の何かが、すでに内在して機能したからではなかったのだろうか。

【注】

- (1) 本文と内容は、陳熙晉箋注『駱臨海集箋注』を底本とし、羅敏中・肖希夙選注『初唐四傑』(嶽麓書社、二〇〇〇年)、倪木興選注『初唐四傑詩選』(人民文學出版社、二〇〇一年)、高玉昆『初唐四傑暨陳子昂詩傳』(吉林人民出版社、二〇〇三年)、黃清泉注譯・陳全得校閱『新譯駱賓王文集』(三民書局、二〇〇三年)など参照。
- (2) 鈴木修次『唐代詩人論(一)』「初唐における歌行體の詩の文藝性」(講談社、一九七四年)。
- (3) 『文華秀麗集』「艷情」〈奉和春閨怨〉詩の抒情の構造」(『有斗柏稜論究』第25號、函館大學付属有斗高等學校、二〇一八年)では「奉和春閨怨」詩三篇の抒情的特質を、『文華秀麗集』「艷情」〈奉和春閨怨〉詩の比較詩學的考察」(同)では「奉和春閨怨」詩三篇における古樂府や初唐歌行體作品からの吸收・保持と排除について具體的に論じている。
- (4) 注1黃清泉注譯・陳全得校閱『新譯駱賓王文集』には、駱詩の特徴として三人稱的人物の設定、また「此時」「此非」「離前」「別後」など時間を示す語を多用して場面の轉換を圖ることなどを挙げる。後者の指摘は「物語り」の要素の指摘と理解できよう。
- (5) 例えば注1倪木興選注『初唐四傑詩選』には「作者抱着對郭氏的滿腔同情、蘸着郭氏的血和泪、抒寫了一个被棄婦女的悲惨命運和悲憤心情。」とある。他の注1同書、また駱祥發『駱賓王詩文故事』(上海人民出版社、二〇一七年)な「奉和春閨怨」詩と駱賓王「艷情、代郭氏贈盧照鄰」詩(半合)
- (6) 注2同書同論。以下の引用部分も同じ。
- (7) 注1倪木興選注『初唐四傑詩選』には「這篇作品、與當時尚風靡一時的艷情詩——宮體、大相徑庭、前者眞人眞事、實情實感、后者无病呻吟、淫靡酥軟。這首詩無疑給當時墮落的詩壇帶來了一股清新氣息、對唐人長篇歌行的開拓无意義。」、同じく注1高玉昆『初唐四傑暨陳子昂詩傳』には「……賓王遂寫成此篇、曲折地反映出封建社會中部分婦女在愛情婚姻生活上的不幸遭遇、抒發了郭氏女的相思相怨之情、在藝術形式上呈現出一種對六朝宮體詩淨化與改造的狀態、……藝術感染力極強、成爲膾炙人口的七言佳篇。」とあり、ともに當時流行する六朝以來の繪空事で淫らな内容の宮體(閨怨)詩を、實情實感に基づく棄婦郭氏の眞情を詠じてえて刷新した佳作、という。
- (8) 注3拙稿前者参照。
- (9) 『經國集』は全二十卷中現存本は六卷。亡佚した十四卷中「詩」を収載するのは十一卷、と小島氏は推測する(『國風暗黒時代の文學』卷中(下)I「經國集の研究」、塙書房、一九八五年)。亡佚した卷に含まれている可能性はある。
- (10) 類題名「艷情」は天曆年間に編撰された『千載佳句』(上)「人事部」に使用されている。これは三漢詩集が少なくとも十世紀中葉までは繼承されていた例の一つであろう。